

地域と学生を結ぶ体験的な学習の研究

—児童教育学科「WE LOVE 鹿児島！」の「里山探索」を事例として—

A Study on Experiential Learning that Connects Local Environment with Students — Analysis of Practice of “Exploration in Village-Vicinity Mountain” as Part of a Subject “WE LOVE KAGOSHIMA!” in the Department of Child Education —

松 崎 康 弘
Yasuhiro Matsuzaki

鹿児島女子短期大学

本稿では、2014年10月に筆者が児童教育学科開設科目「WE LOVE 鹿児島！」の「学校教育分野」で、鹿児島県生活科・総合的学習教育研究協議会とのコラボレーションによって実施したフィールドワーク「里山探索」の実践について報告する。里山の教育的意義についての先行研究から①里山の環境に対する豊かな感性や見識を育成できたか、②地域の景観や文化を総合的に捉えることができたか、③環境における現在の自分の立ち位置を確認することができたか、④「学習コミュニティ」を形成することができたか、という4つの観点を設定し、学生のワークシート記述を分析した。その結果、学生なりに里山の環境に対する豊かな感性や見識を獲得し、地域の景観や文化を総合的に捉えることができたという成果が見られた。また、地域において友人や現職教師と学びあうことの効果を確認することもできた。

キーワード：体験的な学習、地域、里山、学びあい

1. はじめに

「体験のないところに理解はない」¹⁾ とは、大正～昭和初期に旧制諏訪中学校で地理教育実践を行い、その教え子たちが地域に貢献する産業従事者や学者、教師となった三澤勝衛の言葉である。三澤の教育実践の効果を探った拙稿²⁾でも、地域における体験的な調べ学習（調査）が、生徒たちの「郷土（地域）に貢献している」意識を高めている事例について述べた。

また、筆者のライフヒストリーにおいて、小学校5年生当時に所属した「郷土クラブ」というクラブ活動において「縄文式土器づくり」をした体験的な学習が、後の教員としての基盤となっている。顧問の先生とともに焼き物の産地まで粘土を採集に行ったこと、縄文時代の方法に則ってクラブのメンバーとともに土器を製作したこと、その土器を用いて肉を煮て食べたことが、筆者に学ぶことの楽しさを感じさせてくれ、その後の自身の学力向上にもつながっている。小学校時代の生活科等での体験的な学習の効果が、筆者のみならず本学の学生の人格形成にとっても大きな意味をもっていたことは、拙稿³⁾でも明らかにしている。

さらに、筆者の専門領域である生活科教育研究において加納誠司が「川の魅力を伝える大学生の挑戦！」という実践を行ったり⁴⁾、九州地区大学教職課程研究連絡協議会2014年度研究連絡会において大坪靖直が「能動的な学習者たる教員を養成するために、学生には児童生徒に求められている学習スタイルを経験させる必要がある」と述べたりする⁵⁾など、教員養成における体験的な学習の重要性が強く主張されている。

このような背景から、筆者は「郷土（地域）」と「体験」をキーワードに、本学においても表1に示す体験型学習の実践を専門科目の中で行ってきた。ただし、小学校教育を強く意識しているこれらの実践の対象は、ほぼ児童教育学科小・幼コース及び小・保コース（2010（平成22）年度以降）、または初等教育学専攻（2010年度以前）の学生に限定されていた。

児童教育学科では平成26年度より地域志向の一般教養科目「WE LOVE 鹿児島！」（以下、「WL」と記す）について、全学生が共通に学ぶ部分と、テーマごとにグループに別れて学ぶ部分とで構成されることとなり、後者について筆者を含む4名の教員が「学校教育分野」を担当することとなった。同分野を選択した学生は小・幼コース8名、小・保コース8名、幼・保コース17名の計33名である。筆者にとって、一般教養科目において、教科教育法を履修していない学生が半数

以上という中で「地域」と「体験」を重視した実践を行うのは初めてのことである。したがって、WLでの実践を分析することで、本学における体験的な学習の在り方について、新たなヒントが得られるのではないかと考えた。

そこで本稿では、WLの一環として2014（平成26）年10月に実施した「里山探索」を取り上げ、そのねらいについて説明するとともに、学生たちのワークシート記述を分析してその効果と課題を探ることとする。

表1 筆者による「地域と結ぶ」体験的な学習の実践

体験的な学習	実施年度	授業名	ねらいと主な内容
環境教育の教材開発のためのフィールドワーク	平成18年度～現在	総合演習（～平成22年度） 教職実践演習（平成23年度～）	環境教育の担い手たる資質を育成するために、屋久島環境文化研修センターにおいて合宿研修を実施し、自然体験活動や屋久島の幼稚園や小学校で教職に就いている卒業生との交流会を行っている。
社会科の教材開発のためのフィールドワーク	平成16年度～現在	社会	小学校社会科の教材開発に資する力を育成するために、さつま町でのそば打ち体験及びトンボ玉作り体験、枕崎市での見学学習、NHK鹿児島放送局での疑似放送体験、南九州市でのイチゴの収穫体験などを実施した。
生活科の教材開発のためのフィールドワーク	平成16年度～現在	生活（小・幼コース及び小・保コース、初等教育学専攻対象分）	生活科や食育の教材開発に資する力を育成するために、鹿児島市喜入町（～平成24年度）や指宿市（平成25年度～）の食育に取り組む農場を訪問し、ピザ作り体験や家畜との触れ合い体験を実施した。また、「まちたんけん」「甲突川たんけん」なども行った。
小学校との連携	平成22年度～現在	総合演習（平成22年度） 教職実践演習（平成24年度～）	22年度には鹿児島市内の小学校の生活科「まちたんけん」と連携して、短大に小学校2年生を招き、学生が絵本の読み聞かせやボール遊びなどの交流活動の企画・実施をして、生活科教育の実践的な理解を図った。また、24年度以降は、鹿児島市内の小学校の公開研究会に参加する形で授業参観等を行っている。

2. WLにおける里山探索

（1）「里山探索」実施の経緯

本学児童教育学科の平成26年度履修要項には、WLの目的が次のように掲げられている。

学生を鹿児島再発見の旅へと導き、自分の中の地域を見つめ、地域の中に自分自身を位置付ける「ローカル・アイデンティティ」の自覚を促す。同時に地域での体験や貢献活動を含め、地域課題への取り組みを通して意欲的な「地域活性化の担い手」として貢献できる人材となることを目指す。

この目的を受け、「学校教育分野」の趣旨として次の二点を設定した。

- ①地域の様々な資源がどのように学校教育に活用できるかを実地に学び、将来、地域教材の開発ができるための資質を養う。
- ②『県民教育週間』を手掛かりに、『地域に開かれた学校』の在り方について考察する。

一般教養科目とは何か、ひいては教養教育とは何かという大きな問題ともかかわることであり、趣旨の設定については苦慮した。しかし、教養教育と専門教育（あるいは職業人養成教育）とは短大教育の両輪であり、その有機的な連携を図るべきであると考え、上記の趣旨を設定した。「地域教材の開発ができるための資質」にはWLを通して養うべき「ローカル・アイデンティティ」も含まれ、教師や保育者として地域教材を活用し子どもを育てることが、児童教育学科卒業生として果たすべき「地域活性化の担い手」の役割だと考えたためである。

①の趣旨を実現するためにフィールドワークとして設定したのが、筆者も所属する鹿児島県生活科・総合的学習教育研究協議会（以下、「生総研」と記す）の秋季研修会「里山探索」とのコラボレーションである。生総研では、生活科や総合的な学習の時間の授業実践を充実させるためには綿密な教材研究が必要であるとの立場から、これまでに竹を用いた学習道具の製作や動物園見学、身近にある物を活用したおもちゃ作りなどを実施してきた。また、生総研会員には「将来の

教師を育てたい」「学生とともに学びあいたい」という思いがあり、研修会への本学学生の参加を勧められてきていた。その中で、平成26年10月生総研秋季研修会として「里山探索」が実施されることとなった。

「学校教育分野」というテーマ設定とはいえ、現職教師による生活科教育の研修の場である生総研に、生活科教育について専門的に学んでいない幼・保コースの学生を参加させることの妥当性についても検討した。しかし、一般教養科目として地域を見つめ自分を見つめるという目的を達成するには妥当な活動内容だと考えたこと、また、生活科教育が幼児教育に移行する可能性が報道されたこと⁶⁾から、幼・保コースの学生にとっても意義のある学習となると考え、「里山探索」に参加することを決定した。国立教育政策研究所教育課程研究センターが環境教育について「家庭・地域・社会教育施設などとの連携が重要である」「子供同士の交流の機会を設けたり、幼稚園教員と小学校教員との意見交換や合同の研修の機会を設けたりして、それぞれが互いの教育や学習の進め方についての理解を深めることが大切である」⁷⁾と述べていることも、この実践を裏付ける追加の根拠として考えられた。

(2) 里山の教育的意義

生総研が「里山探索」を設定した大きなきっかけは、「日本の故郷の原風景」である「里山」を見ながら環境を考えるという鹿児島放送の「KKB 環境特番 魅力いっぱい鹿児島の里山」(平成26年6月21日放送)⁸⁾に、ベッコウトンボの保護などに取り組む成見和總・生総研名誉顧問が出演し、里山の重要性について説明を行ったことである。

里山(を含めた農山村地域)のもつ教育的意義については、次のような先行研究がある。

野田公夫は「田んぼの学校」を取り上げ、「水田、水路、ため池、里山等を遊びと学びの場として活用し、農業農村の有する多面的機能を利用して環境に対する豊かな感性と見識を持つ人を育て、これを都市と農村の共生、人間と自然の共生につなげる」「子どもたちの遊びも(中略)、いろいろな環境を季節に合わせて使い分けて行われる。しかもその遊びは景観や文化と深い関係にある。だからそれらの遊びは景観や文化までを総合的にとらえることにつながっていくのである。」「里山の自然は農の自然の一部であり、そこには人と自然のかかわりの歴史(文化)が詰まっている。その自然と文化を次の代に引き継いでいく」⁹⁾と述べている(下線部筆者)。豊かな感性と見識を育て、遊びを通して地域を総合的に把握し、「次の代に引き継ぐ」という行動に移せるようにするということは、幼児教育・生活科教育・総合的な学習の時間の目的にも通じる考え方であると言える。

農山村でのフィールドワークにおける大学生の育ちについては、次のような研究がある。

外川隆は、「農山村へ学生とともに学びに行くと、学生の目の色が変わっていくことがわかる。自分自身が多様な人びとや自然に生かされている存在であることに気づき、現在の自分の立ち位置を確認することができるからだと思う。農山村は「第二のキャンパス」として教育的機能を自ら持っているのだ」¹⁰⁾と述べている(下線部筆者)。下線部は、WLが目指す「ローカル・アイデンティティ」にも通じる考え方だと言えよう。

山形大学で教養教育として環境体験型授業「フィールドワーカー共生の森もがみ」を実践している杉原真晃は、「大学が、地域における産学連携による技術向上・革新、産業の発展にとどまらない、地域社会を巻き込んだ学習コミュニティの形成に寄与する必要性」が議論される中、「大学教員と学生と地域住民がともに学びあい、それぞれのよさを引き出していく『学習コミュニティ』が形成されている」¹¹⁾と、その実践の成果を述べている。

これらの先行研究に基づき、今回の「里山探索」の学習成果を次の観点から分析する。

- | |
|---|
| ①里山の環境に対する豊かな感性や見識を育成できたか。
②地域の景観や文化を総合的に捉えることができたか。
③環境における現在の自分の立ち位置を確認することができたか。
④「学習コミュニティ」を形成することができたか。 |
|---|

(3) 具体的な活動内容

具体的な学習活動内容は資料1のとおりである。資料1は、学生に「里山探索」の趣旨や日程等を説明するために配布した資料を一部改変したものである。

場所として選ばれたのは鹿児島市の滝ノ下地区である(地図1)。鹿児島市屈指の児童数を誇る中山小学校の近くにあるながら、典型的な里山の景観が広がる地域である(写真1)。午前中に先述の鹿児島放送の環境特番を視聴した上で、昆虫の専門家である成見生総研名誉顧問や民俗学の専門家である小島摩文生総研会員(鹿児島純心女子大学)らの説明を受けながら探索＝フィールドワークを行い、午後に講話の聴講やふりかえりを実施した。

1. 趣 旨:

鹿児島県生活科・総合的学習教育学会（「生総研」）の秋季研修会（フィールドワーク）に参加することを通じて、地域にある自然環境等の素材をどのように学校教育に反映することができるかを考え、学びます。

2. 日 時：平成26年10月18日（土） 9:00～15:00（WE LOVE 鹿児島！ 3コマ扱い）

3. 場 所：谷山北公民館 及び 周辺地域

4. 日 程:

8:30 短大出発

9:00 鹿児島の里山に関するVTRを視聴

10:00 山歩き（魚や昆虫の観察を予定）

※雨天時は公民館内で秋の自然を使った工作。

12:00 昼食

13:00 生総研の講師陣による講話（成見和總氏、小島摩文氏、高谷哲也氏）

14:00 ふりかえり・話し合い活動

15:00 終了→短大へ

5. 持ち物:

○簡単なハイキングができる服装（長袖、長ズボン、帽子など） ○弁当・水筒

○筆記用具 ○虫よけ ○保険証

※持っている人は捕虫網や虫かご（購入の必要はなし）

6. 移動手段：貸切バス

7. 引率：松崎康弘

資料1 WL「里山探索」学生配布日程表（一部改変）



地図1 鹿児島市滝ノ下周辺地図

（国土地理院発行の2万5千分の1地形図「春山」を使用）



写真1 探索した地域の「里山」の風景

3. WLにおける里山探索の成果

里山探索を終えた後、1時間ほどの時間を使って学生たちによるワークシート記入を行った。ワークシートには以下の課題を提示した。

- A. 午前中の里山探索で見つけたものを、できるだけ書いてください。(ただ「何があった」だけではなく、諸感覚を用いた表現をすること。例「〇〇は◇◇な香りがした。」)
- B. Aで書いたことを踏まえて、それらの素材をどのように教育・保育に活用するか、自分の考えを書いてください。
- C. 講師の講話内容について簡潔に書いてください。

このうち、AとBの記述内容から、里山探索の成果について分析する。なお、A・Bの課題は、もともと井上美智子の「五感を刺激する園庭」¹²⁾を参考に、環境教育を行うために必要な資質を養うため表1に示した屋久島での合宿研修の振り返りとして学生に提示していたものを、今回の取組に応用した。

(1) 自然そのものとの触れ合い、生命との触れ合い

ワークシートAの「見つけたもの」については、主に生総研会員が説明を行ったものが多く記述された。チョウやトンボ、ゲンゴロウといった昆虫、セイタカアワダチソウやアシ、あるいはどんぐりといった植物、コイ、フナ、メダカ、カエルといった水棲動物、それに日本最大のミミズなどである。一方で、川辺の土が「フカフカだった」「マシュマロみたいにふわふわだった」というように、自然を自分なりの感覚で表現する記述も見られた。



写真2 川の様子を観察する学生たち



写真3 川に入り魚とりをする学生たち



写真4 ミミズを観察する学生たち



写真5 ヌマガエルを手にする学生

これらの「見つけたもの」を最も総合的に表現したのが次の記述である。

- ①バスを降りるとタノカンサーがあり、やわらかめの岩でできていることを知った。歩き始めると、セイタカアワダチソウという黄色く背の高い植物がたくさん見えた。茎がビヨビヨと長く、名前のおどろきを感じた。階段を使って川を降りると、ヌマガエルがおり、思っていたより小さかった。触ることができなかったので残念だった。川の中にはカワムツの小魚やホタルの幼虫のえさカワニナなど様々な生き物がいた。川の水は冷たく、いい刺激になった。川

遊びに夢中になりすぎて聞こえなかったが、モズの鳴き声も聞こえたそうだ。他にもシオカラトンボやシジミチョウなど、とても覚えきれない種類の昆虫がたくさんいた。茶色のオオカマキリもあり、どうして緑色じゃないかという話も聞くことができた。川の水はシラス灰を通っているから、とても透き通っていて、光が反射した水面にたくさんのヒメアメンボが浮かんでいて素敵だった。絶滅危惧種となっているゲンゴロウも見ることができた。トンボの中でサイズの大きなものはヤンマだという話を聞いていたが、ミルンヤンマを見ることができた。予想以上に大きくて驚いた。滝に到着すると霧のように水しぶきが上がっていて、感動した。網を落とすと、モズクガニやテナガエビが入っており、すごく大きかった。触りたかった。どんぐりやノボタンなどの植物もたくさん見ることができた。普段何気なく見ている草や花、木など、すべてに名前があることをあらためて感じることもできた。(幼・保コースF・H)(下線部筆者)

ワークシートAの指示に基づき、里山で発見したもののについて視覚・触覚などの諸感覚を用いて感じ、表現していることがわかる。特に下線部は、自然の美しさに対する感動を表現しており注目できる。この学生以外にも、昆虫などの匂いを嗅いだり、落ちていた柿を食べたりしたことを記述し、嗅覚や味覚を用いて学んだことを示したものがあつた。写真2～5からも、学生たちが強い興味と意欲をもって自然とかかわっていることが読み取れる。

このような自然体験が強く印象に残ったためか、26名すべての学生がワークシートBにおいて園外保育や校外学習を想定し、自然そのものの触れ合いを発想した。単純に「観察する」といった記述にとどまるものも見られたが、上記①の記述をした学生は次のように記述している。

川などは子どももすごく楽しめる良い素材だが、それとともにガラスや水の流れの速さなど危険もあるので、その注意すべき点は保育士の心がけが必要だと思った。しかし、水の冷たさや生き物の豊富さ、情景の美しさなど、自然の魅力は子どもに絶対に伝えたいと思った。そのためにも「触ってごらん」「みんな聞いてみて」などの声掛けは大切だなと思った。そのためにも知識が必要なんだと思った。五感を使った保育をしていきたいと思った。(幼・保コースF・H)

これらの記述から、学生なりに環境に対する豊かな感性や見識を獲得することができたと考えられる。このように高い意識をもって保育・教育に取り組む学生を今後も育てていきたい。

(2) 自然物を利用した遊びへの発想

ワークシート提出者26名中23名が、Bの課題について、自然物を利用した遊びを発想している。主に挙げられたのは、「どんぐりを使ってマラカスを作る」「落ち葉を画用紙に貼って絵にする」「ススキを使ってアクセサリを作る」といった製作系の活動である。保育内容や教科教育法などの授業や、幼稚園等での実習で自然物を利用した遊びを学び、経験していることが大きな要因であろう。

ただし、記入時間が十分でなかったこともあってか、単純に「〇〇をする」という記述が目立ち、その活動の目的にまで言及したものは少なかった。その中でも、里山の意義を踏まえた発想をしたと考えられる記述が、次の三つである。

- | |
|---|
| ①道路に落ちていた葉っぱ、木の枝、どんぐりなどを使った製作をしてみたいと思った。また、その素材を使って、見た風景を製作して、子どもたちが大人になった時、大きくなった時、「～の頃、～へ行ってこんなことしたな～」と子どもの頃を思い出して笑顔になれるような保育・遊びをしていきたいと思った。(幼・保コースM・M) |
| ②里山に行って思い出に残ったことを絵にして掲示板に貼り、保護者が子どもたちの作品を見て、里山でこんな発見をしてこんなことを学んだと知ってもらおう機会をつくる。(幼・保コースH・A) |
| ③葉っぱは秋にちなんで、勤労感謝の日の働く人々の絵画製作として、葉っぱを自由に絵画の一部にして、製作したい。そして、完成したものを地域で働く人にプレゼントする。幼稚園と地域とのつながりを大切にする活動であると思う。(幼・保コース F・K1) |

①の学生は、子どもの原体験が成長のための大切な要素であると捉えている。里山の風景を思い出すことで大人が笑顔になれるという発想は、先述の野田の言う「里山の自然は農の自然の一部であり、そこには人と自然のかかわりの歴史(文化)が詰まっている。その自然と文化を次の代に引き継いでいく」というねらいにも通ずるものである。②の学生の、子どもによる里山での発見を保護者に見てもらおうという発想もまた、大人が子どもの発見を認めつつ里山を見つめなおすという点で、このねらいに通ずるのではないかと。自然物と「働く人々」を結び付け、幼稚園と里山を含めた地域とのつながりを考えた③の学生の発想も注目に値する。

自然物を利用した遊びを創造するための指導において、今後、自然と人間を結びつける発想、学校等と地域を結びつける発想、将来の成長を見据えた発想をさらに重視していきたい。

(3) 里山の「総合的な捉え」と保育・教育への活用の意欲



写真6 タノカンサーについての説明を聞く学生たち



写真7 五右衛門風呂の跡に入る学生

今回の里山探検において、野田の言う「農の一部としての自然」としての里山を象徴するものとして「タノカンサー」（田の神様）が挙げられる。探検では小島会員により「豊作をもたらす神」として祭られていること、鹿児島と宮崎の一部のみの独特の文化であることなどが説明され（写真6）、「『シラス』が使われていると聞き、鹿児島、地元が表れていると思いました」（幼・保コースM・M）といった学生の感想へとつながった。また、里山で生きる人々の足跡の一つである五右衛門風呂の跡についても小島会員から説明があり、学生が実際に触れるなどの活動につながった（写真7）。

学生がこのタノカンサーを保育・教育にどのように生かすか考えたものを下記に示す。

①鹿児島文化について学ぶことのできるものがあり、タノカンサーについてや、五右衛門風呂があつて昔のことについてもいろいろ調べられる素材になるのではないかと感じ、田の神様を建てたことについてももっと調べられると思った。（小・保コースY・K）
②上記の物を写真にとり、自分の興味を持ったジャンル（歴史、植物、水の生き物、蝶、トンボ）ごとに別れて、歴史や生態など詳しく調べ、里山探検マップを製作し、グループごとに発表する。（小・幼コースM・Y）
③タノカンサーの絵を描き、田んぼの神様の役割を伝える。（幼・保コースS・M2）
④田の神などのことは、食べ物関係につなげて子どもたちに話をする。（幼・保コースO・M）
⑤「タノカンサー」を子どもたちに見てもらい、「タノカンサー」を紙粘土や段ボールなどで作り、自分たちが普段食べているお米の大切さを知ってもらいたいと思った。子ども一人ひとりが想像する「タノカンサー」を見てみたいと思ったからです。（幼・保コースM・M）
⑥石像や岩など、子どもにとってはただの石かもしれないが、石や石碑などにもしっかりと意味があるということを、子どもたちが分かる言葉で教えたいと思った。そして、子どもたちにとって身近なものに感じられるようになったらいいと思った。（幼・保コースF・H）
⑦タノカンサーで自然教育かつ文化、食育などもできるので、お弁当や給食の時に話をする事で、食べ物に対して考えることができたり、地域について考えることができたりする。（小・保コースI・A）

保育者が話したり、調べ学習の対象としたりすることで、学生がタノカンサーのもつ意義についての理解を図ろうとする実践を想定していることがわかる。②の「里山探検マップ」の発想は、⑦の学生も言及している里山のもつ総合性の表現として評価できる。興味深いのは⑤で、子どもたちがタノカンサーを想像・創造する過程が、里山をつくりあげてきた人々の思考過程を追体験することにつながる可能性を感じられた。

タノカンサーを実践に生かそうと記述した学生が上記の7名しかいなかったことは今後の課題である。学生の気付きを大切にしつつ、他に視野を広げたり、将来の実践につなげようという意識を高めたりする工夫が求められる。ただ、7名とはいえ「地域の景観や文化を総合的に捉えることができた」と判断できる記述ができたことは評価したい。

(4) 学習コミュニティの視点から

今回、生総研の活動とコラボレーションした理由の一つに、現職の教師が研究に取り組む姿を学生たちに見てもらったことがあった。ワークシートでは生総研会員の姿に関する記述はほとんどなかったが、それでも次のような記述をした学生がいた。

①先生方の声掛けについても、さりげない一言のようで、私たちの反応や気付きがより深く感じることができるよう工夫して声掛けをしていたことにも気が付いた。(小・保コースW・R)

②「先生これなにー？」と聞かれたらわからない植物や生物がいっぱいありました。自分がもっと知識を増やして、子どもが自ら気付くような声掛けをしたり、子どもに聞かれたらその間に答えてあげられたりする先生になりたいです。(幼・保コースY・K)

①では生総研会員が学生たちに対して行った説明等を捉え、そこに現職教師ならではの工夫が含まれていることに気付いている。生総研会員からも「学生たちに説明することで、あらためて自分の知識や説明の技術を見つめなおした」という声が聞かれた。②は自分自身の保育者・教師としての目標を設定した文章であるが、同学生のワークシートの「見つけたもの」の部分で「〇〇が～であることを教えてもらった」という記述が目立つことから、生総研会員(＝現職教師)の豊富な知識や、さらに知識を増やそうとする姿勢から感化されたものだと判断できる。

また、探索の最中に学生がトンボを捕まえ、そのトンボが季節的にたいへん珍しいということで成見生総研名誉顧問が大切に保管するシーンがあった。その学生が研究上の大きな発見をしたということで周りの学生も盛り上がり、5名の学生がワークシートに記述をした。その一つが次の記述である。

③友達が捕えたトンボは「新しい発見」に立ち会えた瞬間だったので感動した。トンボを見て歌いながら歩く姿を見て児教らしさを感じたり、他のクラスの雰囲気を知ることができたり、たくさん感じる事ができた里山探索となった。(幼保コースM・M)

今回の実践では厳密な意味での「地域住民」は参加しておらず、「学習コミュニティ」と称するには未熟であるかもしれないが、「友達による発見」に共感し共有する意識は、地域において集団で学ぶことの意義の一つを表している文章だと言えよう。「児教らしさ」という表現からは同じ場で同じ目標に向かって学ぶ仲間意識を、「他のクラスの雰囲気を知ることができた」からはその仲間の多様さを感じたことが読み取れる。

(5) 環境における自分の位置づけ、ローカル・アイデンティティ

「自分が自然に生かされていることへの気付き」「現在の自分の立ち位置を確認する」という視点に直接的につながる記述は、残念ながら見られなかった。ワークシートの課題としてローカル・アイデンティティにつながる項目を提示すべきであったと反省するところである。もっとも、この目的は一度だけのフィールドワークで達成されるものではなく、今後の積み重ねによるところが大きいであろう。

その中でも、次のような記述をした学生がいたことには注目できる。

川で魚、カニ、カエルなど様々な生き物を見たので、7～8月頃に実際に川へ行き、その数日後に川へ行ったことを振り返ってみて、音楽に合わせて、子どもたちがなりきりたいものになりきってもらいたいと思った。なりきる上で、魚などの行動をしっかりと見てもらい、生物の命の大切さや自然と共に生きているということで少しでも子どもに味わってほしいと思った。(幼・保コースM・M)(下線部筆者)

下線部は子どもに期待する成長の姿を表したものであるが、この文章を書くことができた前提として、この学生自身が「自分は自然の一員である」「自分は自然と共生している」と自覚したことが読み取れると考える。

4. おわりに

今回のWL「里山探索」の実践によって、学生なりに里山の環境に対する豊かな感性や見識を獲得し、地域の景観や文化を総合的に捉えることができたという成果が見られた。また、地域住民を交えた形の「学習コミュニティ」にまでは到達していないものの、地域において友人や現職教師と学びあうことの効果を確認することもできた。

一方で、今回の取組は生総研の研修にそのまま参加した形であり、筆者自身が保育・教育に結び付けようという意識が強かったこともあって、学生が里山、ひいては地域の課題を見つけ問題解決を図ろうとする学習にはならなかった。また、先述のように、現職教師との交流はできたものの、地域住民と協働する学習にはならなかった。今回の「里山探索」を含めその実践が地域における学習コミュニティを形成できるかは、今後のWLの課題と言ってよいであろう。

生総研からは次年度以降の学生の参加を快諾していただいたので、学生が主体的に地域の課題に取り組み、地域住民とも協働する一般教養科目WLの在り方を追究していきたい。

謝辞

この度の「WE LOVE 鹿児島！」(学校教育分野)と鹿児島県生活科・総合的学習教育研究協議会とのコラボレーションを快諾してくださった同会会長の山口幸彦先生(鹿児島市立大龍小学校長),講話等を通してご指導いただいた成見和總先生(生総研名誉顧問),小島摩文先生(鹿児島純心女子大学),高谷哲也先生(鹿児島大学)をはじめ,生総研の会員の皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 三澤勝衛「郷土地理教育論」(矢澤大二編『三澤勝衛著作集2 風土論(一)』みすず書房,1979年)
 - 2) 松崎康弘「郷土のための地理教育の構想」(谷川彰英監修『市民教育への改革』東京書籍,2010年)
 - 3) 松崎康弘「社会とのかかわりを深める生活科授業」(小柳正司・八田明夫編著『生活科・総合的学習の新展開 「生きる力」を育むために』あいり出版,2013年)
 - 4) 加納誠司『子どもが生きる 授業が生きる 新しい生活科がめざす道』大日本図書,2010年
 - 5) 大坪靖直 九州地区大学教職課程研究連絡協議会2014年度研究連絡会講演「これからの教師養成に求められるもの Teach から Coach へ」
 - 6) 毎日新聞2014年7月12日 一面「幼児教育に小1内容 文科省検討 生活科など想定」。
 - 7) 国立教育政策研究所教育課程研究センター『環境教育指導資料【幼稚園・小学校編】』東洋館出版社,2014年
 - 8) 番組情報は鹿児島放送ホームページ <http://www.kkb.co.jp/kankyo/2014/>
 - 9) 野田公夫・守山弘・高橋佳孝・九鬼康彰『シリーズ地域の再生17 里山・遊休農地を生かす 新しい協働＝コモンズ形成の場』農山漁村文化協会,2011年
 - 10) 山西雄二・上條直美・近藤牧子編 外山隆ほか著『地域から描くこれからの開発教育』新評論,2008年
 - 11) 杉原真晃・小田隆治編著『学生主体授業の冒険 自ら学び,考える大学生を育む』ナカニシヤ出版,2010年
 - 12) 井上美智子・無藤隆・神田浩行編著『むすんでみよう子どもと自然 保育現場での環境教育実践ガイド』北大路書房,2010年
- (2014年12月3日 受理)